

震災20年シンポジウム冊子

明日へ 伝えたい

平成7年1月17日午前5時46分52秒発生

阪神・淡路大震災



兵庫県阪神北県民局
宝塚市



伝える人 04
これからを生きる子どもたちへ
今、防災に関わる人へ 06
より良い社会を願い、一歩踏み出そうとしている人へ 08
復興したまちで商売をする人へ 10
次のボランティア活動者へ 12
若き女性たちへ 14

あの日の景色をふりかえる

花のみち 16
川面3・4丁目 17
宝塚小学校北側 18
中山寺1丁目 19
阪神競馬場 20
売布神社駅前 21

鼎談 22

ていだん
阪神・淡路大震災から20年を迎えて

あの日宝塚で 26

市民が語る阪神・淡路大震災

防災ガイド 30

36 タイムラインで見る宝塚市の
1995年（平成7年）「1月17日」

この冊子は、阪神北県民局と宝塚市が協働で作成しました。

阪神・淡路大震災の年に生まれた子どもたちは20歳になりました。^{はたち}
時の流れは私たちの記憶を徐々に薄れさせ、あの日からその後の日々
を語る機会も少なくなりました。被災したまちは変貌を遂げ、人々
はそれぞれの思いを抱えて、それでも必死に生きてきました。
私たちは生ある限り、亡くなられた方々の御霊に^{みたま}祈りを捧げ、あの
日を記していくことが大切だと考えています。それが「被災地」であつ
た本市の役目であると…。

このたび20年の歩みを振り返ると共にそのことを教訓にした備えの
一端を冊子としてまとめました。お読みいただければ幸いです。

宝塚市長 中川智子

伝え人

震災時宝塚市在住
池田龍平
いけだりゅうへい
まりこ
真理子



池田 龍平(父) 真理子(母) 優海(娘) 拓真(息子)
「優海の通う保育園では、大人が子どもたちに震災体験を聞かせる機会がありました。『おうちが壊れたんだって』とか、話だけでも怖かったようです。でもそういう強烈に記憶に残る思い出は、この子が大きくなった時にも忘れないでしょうし、いい経験になっていると思います」と話す池田夫妻

これからを生きる 子どもたちへ

起きた」と感じたそうです。病院は負傷された方であふれ、ご遺体がひっきりなしに運ばれてくる状態だったとも聞いています。

その様子を見た父と兄から「こんな小さな怪我で病院には行く時ではない」と聞かされた記憶があります。

池田龍平 私たちはこんなに大きな地震が来るとは思っていませんでした。しかし、あの震災で、災害はいつでも発生するのだと学びました。だから備えておくことが大切。

我が家では日頃から水や、日常で食べて補充するローリングストック方式の非常食を備蓄しています。そのことから、普段の生活の中で備えることや心構えを子どもたちが自然と学んでくれればと思います。

実は、私たちは子どもだったこともあり、震災の記憶を話し合う機会はありませんでした。経験したということで、私たちは、大人からあの震災のことを正確に伝えられていないのではないかと考えます。震災のことは記録として残っていても、記憶や思

池田龍平 私は当時中学1年生、宝塚市逆瀬川の社宅に父・兄・姉と住んでいました。

あの日は、明け方なんとなく目が覚めて、トラックが走っているのかと思うような音を聞きました。トラックにしては全然音が遠のかないなあ、と思っていたら今まで体験したことのないような大きな揺れが。今思えばそれは地震の前兆の地鳴りだったようです。

池田真理子 私は小学3年生で西宮在住、父・母・兄の4人家族でした。

前の晩、月が赤かったのを覚えていました。ガラスで怪我をしたため父と病院に向かう兄は、車中から見える景色が、見慣れたものが全く違い「これは大変なことが

いは伝えなければ残りません。ですから、この子たちに日頃から「パパやママが子どもの頃に大きな地震があったんだよ」と話していきたいですね。

そして、災害で大変な時こそ、人と人のつながりや分け合う気持ちを忘れない優しい人に育ってほしいです。自分の家族や他人を思いやれる人になってほしい。

今回の取材は当時を思い出し考える良い機会になりました。あらゆる世代の方が震災の話を語る機会があれば、この子たちにもっといろいろなことを伝えられるでしょうし、私たち自身も学ぶことができますと思います。そうやってこの子たちや、その先の世代にも思いを伝えていければと思います。

※ローリングストック方式：日常生活で使う食材などを多めに常備して使いながら、いざという時のために備える災害対策



防災公園 末広中央公園
水道水と直結した『耐震性貯水槽』があり、約100トンの水を貯めています。災害時に給水が停止した時には、約10,000人の飲料水として3日間給水ができます。また、ステージの上にはソーラーパネルを備え、それ以外にも風力と太陽光で発電する装置もあり、非常用の電源として使われます。

伝え人

宝塚市西消防署 署長
おにし よしのぶ
尾西 義信

今、防災に関わる人へ



宝塚市総合防災訓練の様子



左/本山 震災が起きた日、1歳の誕生日でした。直後は、公民館での炊き出しの食事や、市役所からのおむつの配給など、多くの人に支え、助けてもらったと家族から聞きました。震災を忘れず、次の災害から市民を守りたい。そんな思いで、レスキュー隊員を志しました。

あの朝幸いにも自宅が停電しなかったため、リアルタイムで流れるテレビからの情報がとれました。「大変なことが起きた」とすぐに職場の消防署に向かいました。

まちのあちこちで家が倒壊し、その下に多くの人が倒れていました。しかし、救出するための機材が足りない。余震が続く中、私たち消防士だけでなく地域の方々も一緒に一人でも多くの命を助けたいと、素手で必死に救助活動をしました。

しかし、残念ながら午後になると、負傷者も増え、ご遺体も増えていきました。大変無念でした。

次の日、安否確認に、倒壊したマンションや家屋を回りました。これは大変難航した仕事の一つです。そのような中、誰もいない家屋を見るたびに、どうか無事に避難してほしいと願う気持ちでした。

あのような大災害の場合は、一

時も無駄にできないので、「ここは空き家だ」「この家の住人は昨日から旅行に行っている」「この家のおばあさんは奥の座敷で寝ている」などの情報を持っておられる地域の方と一緒に動くことが重要だとつくづく感じました。私たち消防職員だけの力では限界がある。消防は普段市民の家の中まで入っていけないので、地域の人が密にながっていて、情報共有していることが大切なのです。

震災後、市内で自主防災組織が多く結成され、市民の防災意識はとて高くなっていると感じます。普段の活動によって、震災時の救助活動が左右されますから、今後は組織内を充実させていかなければいけません。

震災の時の経験を教訓とし、地域や自主防災組織から、防災訓練に呼ばれたらできる限り協力するように努め、情報の重要性を説明するなど、目に見える関係を築く

ようにと、私は消防署員を日頃から指導しています。

もう一つ伝えているのは、「食料品を何も持たず、手ぶらで出勤してはいけません」ということ。震災のあの朝、私は自宅にある食料を持てるだけ持って出勤しました。数日間泊まり込みで、救助活動することが発生しても対応できるように、今でも私はお弁当と夜食水を用意して出勤します。救助活動を万全の態勢で行うために、皆にも実践してもらいたいです。

※自主防災組織：「自分たちのまちは自分たちで守ろう」をスローガンに主に自治会単位で結成され、会長、副会長のほか、情報班、消火班、救出・救護班、避難誘導班、給食・給水班などで編成され、各役割があります。平常時は、訓練や点検など災害に備え、災害発生時は、各役割に応じて、防災活動の一翼を担います。



伝え人

特定非営利活動法人
こむの事業所 代表理事
まつふじせいいち
松藤 聖一

松藤 聖一
宝塚市役所を退職後、誰もが排除されない地域社会、福祉コミュニティを作ることを目指して特定非営利活動法人こむの事業所を設立。

より良い社会を願い、 一歩踏み出そうとしている人へ

上/震災時に全国から寄せられた支援物資が積み上げられた市民ホール
下/現在の市民ホールは、音楽コンサートや各種展示などで活用されている



もりあやこ
故・森 綾子

阪神・淡路大震災発生時、宝塚市社会福祉協議会ボランティア活動センター所長代理。震災からすぐに市役所内に設置されたボランティアセンターで全国から集まった5万人のボランティアコーディネーションを行う。その後、特定非営利活動法人宝塚NPOセンターを設立し事務局長として活躍し、宝塚市のみならず兵庫県内の市民活動の発展に尽力した。2011年(平成23年)2月22日62歳で逝去される。写真は、平成22年度内閣府女性のチャレンジ賞特別部門賞を受賞した際の笑顔。

阪神・淡路大震災当時、私は宝塚市役所の福祉推進課と福祉総務課の課長を兼務していましたので、行政の窓口として避難所支援などの対応をしていました。1月17日当日の夕方、市役所に全国からボランティアが集まり始め、時間が経つにつれその勢いは増していきました。救援活動にはこの人たちの力が必要と考え、今、思うと画期的判断だったと思いますが1月21日に机

2台と電話1本だけの社会福祉協議会ボランティアセンターを市庁舎に置き対応をすることになりました。その中心にいたのが森綾子さんのボランティアに限界を感じていた森さんは、震災の前年に各分野のボランティアが集った『ボランティアフェスティバル』を開きのベ1400人が参加するようなネットワークを作っており、あの混乱の

中でもボランティアネットワークを機能的に動かすことができた。森さんだからこそ成し遂げられたと確信しています。森さんは、一言で言う『戦友』でした。あの状況下、過労死をするのではないかと思う場面もありましたが、片方は行政マン、片方はボランティア活動を担う者として、同じ庁舎の中で直面する問題にお互いに全力で取り組んでいる

と思うと頑張れました。森さんの考え方の根本にあるのは、市民の持つパワーをどのように社会に生かせるのかという問いで、その『答え』を探し公平で公正そして持続的な活動の形を求めNPOの道を選び進んでいかれたのだと思います。今我々は、森さんが見つけた『答え』を形にできているのか問いかけられているのかもしれないですね。

伝え人

元祖やきもち河本本舗

河本 宏



左/河本 宏(父)
右/河本 茂雄(子)

復興したまちで商売をする人へ

震災後は、自治会や商業者、NPOの方々や協力して『夏祭り』を復活させるなど、気持ちの復興に尽力しました。特に第1回夏祭りの皆さんの笑顔は嬉しいものでした。その後、駅前の建物や花のみちは整備されましたが、店舗の

入れ替わりは寂しい気もします。震災前、おみやげ屋は15軒でしたが、今は3軒となり、宝塚駅周辺は、以前のほうがにぎわっていたように感じます。特に、宝塚ファミリールンドの閉園後からは行き交う人が少なくなった気がします。

しかし、その時代時代に応じて、私たち商業者も改革していかないといけないと思っています。震災後に温泉街からかたちを変え、宝塚ファミリールンドの跡地も新しい建物が建つなど、宝塚駅の周辺環境は変わっていきいますが、これ

あの朝、激しい揺れが収まった後、頭の上10センチ程離れたところに、タンスが倒れていました。命拾いしたのも束の間、宝塚市川面3丁目にあった自宅は全壊したため仮住まいを探すことから始めなくてはいけませんでした。見つけた時には家族の長として、これで家族が安心して生活ができると思いホッと胸をなでおろしたことを覚えています。

私が経営している『やきもち屋』は、平成5年の宝塚駅前再開発事業で、現在のソリオに移転して無事でしたので、震災の1週間後に営業を再開できました。当時の私にとって、働く場所があることは、とてもありがたかったです。

しかし、店の中から見えていた宝塚歌劇やファミリールンドから帰る家族連れが笑顔で歩いていたまち並みは、多くの店舗が傾き、がれきが積みあがっていました。

までが恵まれすぎていたのかもしれない。私たち親子も、『やきもち屋』と同じソリオ内で息子が営んでいるパン屋と二人三脚で頑張っています。地域の商店と協力し、また競いあって、宝塚駅前にぎわいを取り戻したいです。

息子には、常々、商売を続けるために「体を大事にしなさい」と言っています。そして「おじいさん、おばあさんのおかげだよ」と、先代が培ってくれた地域のつながりや、長年の信用力の大きさも教えています。今日まで『やきもち屋』を続けられたこと、新しくパン屋を始められたことは、自分の力だけじゃない。地域の多くの人たちに支えられ、助けてもらっているおかげなのです。

何が起ころうとも、大切なことは変わりません。感謝し楽しみながら、これからも地域密着でやっていきます。また、そんな想いを伝え続けていきたいです。



くろだ ゆうこ
故・黒田 裕子

震災当日に宝塚市立総合体育館に応急救護所を開設。当時、実施されたケアや避難所運営は現在の避難所運営の礎となっている。その後、神戸市内の仮設住宅で健康相談などのボランティア活動をし、高齢者らのケアに尽力した。東日本大震災などの被災地支援も続ける。内閣府総務大臣賞など受賞多数。2014年（平成26年）9月24日73歳で逝去される。

次のボランティア活動者へ

伝え人

元宝塚市立病院 管理師長
やまもと やすえ
山本 保榮

阪神・淡路大震災前、宝塚市立病院で働いていた私は、当時外科病棟の看護師長を勤め、後に全国的に震災ボランティアで活躍した黒田裕子さんの『金魚のフン』と書かれていました。今は、そう呼ばれていたことを誇りに思っています。ある夜、2人で末期ガンの患者さんのケアを

している時、体位を変える度に痛みを訴える患者さんに対して「ゴメンね」と何度も声掛けをされる黒田さんは、最後に「お疲れ様でした」とおっしゃいました。私は、その一言にハッと気付かされたのです。他の患者さんからの鳴り続けるナースコールに焦っていた私に対し、黒田さんは目の前の患者さんへの向き合い、最後にいただいた言葉がかけられました。その姿勢は仕事としての看護だけではなく、人の命に向き合うことを教えてくれました。この姿勢は、後のボランティア活動に引き継がれていたと思います。



東日本大震災での被災者支援の様子



山本 保榮
宝塚市立病院開院時から看護師として外科病棟に勤務。外科病棟17名の看護師の一人として看護師長の黒田裕子さんと出会う。

伝え人

宝塚市婦人会 副会長
うえだ きよこ
植田 清子



若き女性たちへ

左／植田 清子（宝塚市婦人会 副会長）
右／濃野 秋子（宝塚市中筋在住の主婦）



総合防災訓練での炊き出しの様子



左／濃野 「自宅は1階の屋根が落ち、2階が1階に。震災当時大学3年生でした。休校の間、仮住まい先の伊丹市から、神戸市内の炊き出しのボランティアに参加しました。震災の体験は、つらいことも多く、あまり話してきませんでした。ちゃんと語り合い、またそれを伝えなければいけませんね」

体調を崩していた母が、退院してきた翌日に震災が発生し築20年の自宅は全壊しました。2階にいた家族は無事でしたが、1階で寝ていた母は生き埋めになってしまいました。暗闇の中、声を頼りに助けようとしても思うように進みませんでした。そんな時、ご近所の方が車のヘッドライトで倒壊した箇所を照らし、母を助け出してくれたことは本当にありがたかったです。古い家が多い宝塚市中筋地区は家の倒壊など甚大な被害が多くありました。寝ていた場所で生死が

分かれたご家庭も有り、今でも、思い出す度つらくなります。しかし、当時の婦人会は、すぐに会員が安否確認に走り回り、元氣を出さなければと強く、冷静にふるまい、炊き出しや避難所への慰問活動を始めたのです。人は、本来自分が思っているよりたくましいのかもかもしれません。今の婦人会も毎年、宝塚市主催のハーフマラソンや総合防災訓練で豚汁の炊き出しをまだ早い時間から準備しています。毎年2回の炊き出しは、緊急時の予行練習にもなっている大切

な自主防災訓練だと思っています。食べた人に「おいしい。ありがとう」と笑顔で言われると、震災当時の暗く寒い日々、温かい食事がありがたかったことが思い出され、今、皆が無事で過ごせることを感謝し、この助け合いの心を守っていきたく強く思います。被害が大きかった地区は、家の建て替えが進みました。震災経験者たちのまちづくりは、外観や内装の美しさより、丈夫な建物で、常に水や食料を備えるなど、防災意識の高い安全性を優先させるも

のでした。しかしもう一つ大切なのは、人と人のつながりではないでしょうか。炊き出し、盆踊り、だんじりなど人々が集まって楽しく過ごす伝統行事は子どもや孫のために、これからも伝えていきたいと思っています。

あの悲惨な震災は、くしくも地域のつながりや団結力を見直すきっかけになり、心の温かさを教えてくれました。

川面3・4丁目

あの日の景色をふりかえる 2



花のみち

あの日の景色をふりかえる 1



(現在)
住宅は建て直され当時と様変わりしているが、
住民と生活の風景は変わらず、まちに息づいている。

(当時)
宝塚市川面3丁目は373世帯のうち291世帯、
4丁目は271世帯のうち212世帯と
80%程にあたる世帯が全半壊
もしくは一部損壊の被害を受けた。



(当時)
宝塚大劇場へとつづく花のみちは
20以上の店が被害を受けた。
この震災で市内の14%もの店舗が全壊
もしくは半壊という状況であった。

(現在)
連日、多くの人でにぎわう花のみち。
商店のあった場所には花のみちセルカができ、
観光客や地元の人々に愛されている。

中山寺1丁目

あの日の景色をふりかえる 4



(当時)
271世帯のうち、半数近くの46%が全壊。半壊や一部損壊を加えると86%の世帯が被害を受けた。阪急中山駅（現・中山観音駅）からすぐの国道176号線にも大きな被害があり、傾いたマンションやビルも多く見られた。

(現在)
国道沿いの建て直されたビルやマンション。耐震補強も施され、さらに力強く人々の生活を守っている。

宝塚小学校北側

あの日の景色をふりかえる 3



(当時)
宝塚市御殿山は1200世帯以上が住んでおり、場所によって被害の状況も様々であった。しかし半数以上の家屋が被害を受けた。

(現在)
当時崩れた住宅も新たに建て直され、新しいまちの景色を作り出している。

売布神社駅前

あの日の景色をふりかえる 6



(当時)
売布神社駅周辺も多くの世帯が集まっており、80%以上の世帯が何らかの被害を受けた。

(現在)
駅周辺は大きく様変わりし、ピピアめふのような大型の商業・住宅・公益の複合施設もできており、市民の憩いの場として活用されている。

阪神競馬場

あの日の景色をふりかえる 5



(当時)
シンボルの大屋根の支柱や立体駐車場や正門の歩道橋が被害を受けた。無事であった厩舎地区は被災者の避難場所として使用された。

(現在)
約7カ月の工期と工事費133億円を投じて復旧工事をした。休日には馬との触れ合いイベントも開催されており、競馬ファンのみならず家族で遊びに来る人も多い。

鼎談

神戸大学名誉教授
ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長
宝塚市政策アドバイザー
むろさき よしてる
室崎 益輝

宝塚市長
なかがわ ともこ
中川 智子

阪神北県民局長
たき かずしげ
多木 和重

阪神・淡路大震災から 20年を迎えて



支援というものは与えるものではなく、
引き出すもの。(室崎)

と上がっているのを見た瞬間。神戸は火の海になると思い、ぞっとしました。次の日、武庫川を越えて、国道2号線あたりをずっと歩いていたら、突然視界が広がりが、六甲山がきれいに見えました。建物が全部壊れ、全部低くなっている。私のそれまでの研究から、木造住宅がこんな壊れ方をするとは思っていませんでした。全部完全に、瓦礫の山に一瞬にして変わっていました。青々とした空と粉々になった景色を見た時に、すごくショックで、その時初めて大変なことが起きたと思いました。大学に行くと、学生がみな血の気が失せたように茫然としていました。下宿がつぶれて行く所がない。避難所に行くとき若い人は入れない。そのため、みな大学にきました。彼らは被災者です。その顔は今でも覚えています。

景が忘れられない。もう全然違う光景が広がったのです。神戸のまちに出た時の光景は忘れられないです。
中川 私の場合は、光景ではなく市民の活動です。私は3日目から動き始めました。2週間目に、絵本やお菓子をリュックに詰めて神戸に行った時に、小学生に、「おばちゃん、今日は何恵んでくれるの?」と言われて、「恵んでくれるの?」なんて子どもに言わせるような活動は、私は絶対にはいけません。強く思ったのです。被災した人々のプライドを守ることが大切だと。その言葉が刃(やいば)のように突き刺さったので、次にテレビや冷蔵庫や洗濯機などの電化製品をリサイクルし仮設住宅に届ける活動を始めた時に無料で渡すのでなく、5円でも10円でもいいからお金を出してもらおうようにしました。買って出発する。自力で前に進んでいかないと、人は立ち直ることができないのではないかと強く思いました。
室崎 まさにそうです。阪神・淡路大震災の時は、支援というものは与えるものではなくて、引き出すものだとすることに

気付きました。被災者の力を引き出すように支援しないといけない。自分たちで解決していく力を持つようにすることは、とても重要な教訓です。東日本大震災の支援を見ていると、湯水のようにお金が出ている。そうすると何が大切か考えずに、もらえる物は何でももらおう形になり、自分たちの頭で考えて復興していくという気にならない。
中川 こだわったのは、救援物資は、「自分もらって嬉しい物を送ってください」と「手紙を必ず添えてください」の2つ。特に大事なものは心を添えることだと思います。
多木 ボランティア活動を始めたきっかけは何でしたか?
中川 被災地にいるからこそ、じっとしていられない、いたたまれなかったという理由だけです。
多木 ご自身が被災者でありながら、ということですね。
中川 ええ。家も家族も無事だったので、こんな中で今動かないと、一生後悔



室崎 益輝

中川 今から20年前の1月17日、あの日はどちらにいらしたのですか?

室崎 大阪の上本町のホテルに泊まっていたんですが、地震で叩き起こされました。上本町の国際交流センターで、アメリカと日本の防災研究者が30名程集まって日米の都市防災シンポジウムを17日から始める予定でした。シンポジウムは、そろそろ関西でも大きな地震があるかもしれないという警告を出す意味で大阪を会場に設定しました。

中川 多木県民局長はどちらに?

多木 5時46分ですので、加古川の自宅で寝ていました。我が家は築100年以上と古いこともあって、あの揺れは、家がつぶれるかと思うくらいの衝撃でした。

中川 私は震度7弱の激しい揺れを宝塚の自宅で体験しました。2段ベッドで寝ていて、娘が上で私が下で、体が宙に浮いて、思いきり下に叩きつけられました。直下型でしたから。

室崎 軽くても重くても変わりなく浮き上がります。みんな無重力状態ですから。

中川 震災に関連する忘れられない光景はありますか?

室崎 いくつもあります。1日目、飛行機中継の神戸の映像で、煙が何本かスーッと

すると。ただそれだけでした。

さて、阪神・淡路大震災から20年経ったわけですが、復興を遂げたとは言われませんが、どうなれば、一つの区切りとされるのでしょうか?

室崎 最近、私は立て直しと世直しがあると説明しています。災害の一つの側面として、災害は命も、住まいも仕事も、あらゆるものを奪います。立て直しとは、その失ったものを住宅再建や、地域のコミュニティを立て直して取り戻すことです。しかし災害はその時代、その社会の持っているひずみや問題を投げかけてもくる。経済優先で、裏側に潜んでいる危

うさに気付かないまま都市計画し、まちづくりしていた。それを元に戻すのではなく、新しい社会を創れというメッセージを、私は世直しと言っています。自然との共生を図る、高齢化社会に対して新しい福祉の仕組みを創るというようなことです。後者は、ボランティアとNPOでかなり進みました。一方、自然と人間の関係は、まだまだ解決できていません。とりあえずの課題は達成できたけど、もっと大きなこの社会の将来の課題に対しては問題を投げかけられたままで、答えを出せないでいる。そういう意味で言うところ『復興』には区切りがないように思います。

中川 多くの古い家屋が倒壊しました。宝塚もその後たくさんのマンションが建設されたわけですが、まちの姿を変えてしまおうのが災害だと思のです。また、そこには一人ひとりにドラマがあるという痛感を感じます。市長としては、次に災害があった時に、市民の命をどう守るか。宝塚で亡くなられた118人の方々の命が何故守れなかったのかを検証し、命を守りたい。そのようなまちづくりが

この復興の証になるのではないかなと思います。

室崎 市民がもう少し社会の主人公にならないといけないというのも大きな教訓です。理想から言ったらまだ遠いかも知れませんが、阪神・淡路大震災前に比べると随分進みました。市民力の裾野が広がっている。東日本大震災でも、兵庫から市民活動をしている人が駆けつけている。他方で言うところと本当に安全なまちづくりをしているか。個々人で言うと、地震保険の加入もフェニックス共済の加入率も低い。家の耐震補強も進んでいない。結局お金のかかるものは進まない。阪神・淡路大震災は必ずしも大きい物はいいことではないのだということ、人口減少する社会なのに今までのようにどんどん物を作る時代ではないということも教えてくれたと思うが、社会全体が経済効率、採算性のいいものが先になり、安全性が後ろになってしまっている。安全性と経済性のバランスを取ることも重要な教訓です。

命を守りたい。そのようなまちづくりが復興の証になるのではと思う。(中川)

術を活用して情報発信し、もっと広く支えていく人を集めないといけません。

中川 そうですね。防災教育を一言で言っても難しいなと思っています。ご助言をいただけますか？

室崎 本来の流れは、地域社会が良くなり、その中で親が良くなって、親が子どもに教育する、ですが、今は違います。子どもが変わると、親が変わる。親が変わると初めて地域社会が変わるのです。ですから、学校教育はとても重要です。子どもに「どうして我が家の家具は転倒防止してないの？」と言われると、親がびっくりするわけです。子どもが親を、



多木 青少年教育では、大人が変われば子どもも変わるといふキャッチフレーズをつけているのです。逆ですね。子どもが変われば…
室崎 つまり、子ども自身の生きる力をどう育んでいくか、ということだと思います。
中川 自然のことが

多木 フェニックス

共済ですが、住宅再建共済、あれは兵庫で加入率15%を目指しているのですが、なかなか…今9.2%です。

室崎 このフェニックス共済は義援金の前払いです。みんなが助け合う。共済というのはいんが助け合うわけです。

多木 負担だけして給付がもらえなくても、被災していないわけですから「これ、もらえなくてよかった」と言えるようにならないといけないのですね。

中川 安全性が優先されていない原因は、20年の歳月でしょうか？

室崎 20年の歳月。一つはそうです。時間が経てば経つ程大切なことを忘れてしまふ。それを忘れさせないような取り組みが弱かったということかもしれません。防災教育や意識啓発はとももしっかりしているのですが、それでも足りない。

多木 本当に、分からないで安全を軽視している人、風化によって軽視している人もいれば、分かっているながら、確率の

「大人が変われば子どもも変わる」というキャッチフレーズは逆ですね。(多木)

分かっていけば、こういう時にどうやって命を守るか、直観力が働くのですね。

最後に、お伺いします。いつ襲ってくるかもしれない災害に対してどのような取り組みが大切でしょうか？

室崎 ハードとソフトとヒューマンですね。ハードは、例えば地震があっても壊れないような住宅を建てる、火事が起きても燃え広がらないようにする、というように、建物やまち全体を頑丈にすることです。ソフトは、コミュニティ、あるいはその情報データベースや警報システムを作ること。ヒューマンが教育。この3つを良くしないといけません。一番遅れているのはハードです。私はまちの中に命を守る隙間のようなポケットパークや、緑や水をもっとしっかり入れていく必要があると考えています。宝塚は、山の上に住宅地をたくさん作りすぎているが、そのようなまちに近いです。

多木 木造密集住宅地はなかなか建て替えが進みません。建築基準法の制限があるから、古い家が建て替えられず、紛議



中川 智子

問題で天秤にかけてとりあえずは経済性を優先する人もいます。防災意識は確実に阪神・淡路大震災以降進みましたが。それまでは震災が起こるということが浸透していなかったもので、17日に自分が何をしたらいいのか全く分からなかった。

室崎 直後はそうですね。みな混乱をして…。ボランティアセンターを作る仕組みやボランティアのコーディネート養成が進んで、一応定着はしてきていますが、ではうまくいっているのか？と言うと、またそこは違います。丹波でも広島でも混乱は起きています。本当は、こういう大変なことが起きています、とフェイスブックやツイッターなどIT技

が続いていることがあります。一つの公共の空間という位置付けをして、ある程度公共的な資金を入れていけば解決の糸口がつかめるような問題、という気がします。そこも先程の経済と言いますか、お金の問題が絡んできますよね。

室崎 アメニティがあつてコミュニティがあつたら結果としてセキュリティが付いてくる。セキュリティのためにアメニティが必要です。アメニティとは、緑だとか水だとか、あとは文化だとか歴史といったものです。コミュニティは人のつながり、あるいは行政と住民の信頼関係です。防災とは、強くすると同時にやわらかさを与えるということです。コンクリートジャングルを作ることではなくて、やわらかさ：本当に文化があつてきれいな自然があるまちを作ることが根本だといけません。まさに『やわらかな防災』を目指すということだと思います。

中川 どうも、今日は本当にありがとうございました。
《平成27年10月7日(水)》

私の体験

河原勝己

大きな揺れに掛時計が頭に直撃、キズを負いびっくり。台所は食器棚や冷蔵庫が大きくずれ、中の物は台所中にぐちゃぐちゃ。店は棚の商品が全部落ちて8割がたアウト。病院勤めの娘の寮に行ってみるとほぼ全壊で、部屋はタンスは倒れ、水道が破裂して水がビュンビュン出っぱなし。誰もおらずこれは大変なことになったと、病院に駆けつけると真っ暗、ガスの臭いも。中に入ると足元がぬるぬるとすべる、目を凝らしてよく見るとあっちこちに血だまりができていた。幸い全員が元気でケガ人の手当をしており一安心。姉にも電話がつかず、JR兵庫駅近くまで自転車3時間半かけて行った。無事でホッと一安心。帰り道、歩道上のブルーシートが風にあおられてロウ人形のような物が見えた。これがなんとほこりをかぶって真っ白になった死体で、生涯二度と見たくない光景でした。

両親との想いで

栗山寿美子

私のふるさととは大好きな宝塚。阪神・淡路大震災では自宅は傾いたものの、幸い両親は無事でした。私の三木の家に来てもらい一年半ほど過ぎたある日、父親が「もう一度あの土地に家を建てようと思う」と。昔馴染みの友人たちとも離れ、環境が一変して、少しずつ認知症状が進んで行く母親（妻）を見て不憫に思い、元の生活に戻った方が妻のために良いと思ったのでしょね。新居で二人の生活、自分のできる事は自分でするよう頑張って六年間を過ごしました。その後また三木に戻りましたが、父の事を頼り甘えていた母と、その母の百日の法要を待てずに逝った優しい父、とにかく私たちには優しい自慢の両親でした。今も私の心の中は、幼い頃からの楽しかった宝塚の思い出と両親への感謝の気持ちでいっぱいです。そして両親を支えて下さった地域の皆さん、お礼が遅くなりましたが本当にありがとうございました。



あの日 宝塚で

市民が語る

阪神・淡路大震災

写真寄稿者 熊崎俊三郎

鎮魂

武田雪緒

忘れもしない不気味な地鳴り、その直後のことでした。すさまじい轟音とともに建物全体に衝撃がはしたのです。揺れは長時間つづき、妹の悲鳴と食器類の割れる音、鉄骨の軋みが闇を引き裂いていました。このときはまだ何が起こったのか、わかりませんでした。その後、テレビ画面が映し出した映像、ねじ曲がった橋脚、燃え盛る家々、大好きだった神戸の町は無惨にも破壊され、人々が、あつという間に建物の下敷きとなったのです。もはや言葉もありません。東灘区の友人と一カ月後によりやく連絡がとれたときには、安堵のあまり大声で泣きました。私は宝塚市民となり九年目、この町もこの国も大好きです。天変地異と戦うことはできませんが、備えることぐらいはできます。犠牲になられた方々の経験を無駄にしないためにも、過去を教訓に、防災意識を高め、気をひきしめていくことが今後の大きな課題だと思います。

震災体験記

斎藤吉枝

お弁当作りに炊事場に立っていた、その時、ゴーと音がして、冷蔵庫が歩いた。「火を切れー」と主人の声、キヤーカー大声を出して心の動揺をおさえた。学校は避難場所として多くの人達が来られていっぱい。家が近くということで、世話を申し出た。寒い時期だったので火の管理と病気の対応が急務でした。一ヶ月すぎると要望や苦情も聞き入れていただき、青もののおひたしを希望したら、大ボールいっぱい届けていただきました。ボランティアは全国から来て下さって、すべての食料持ち込みの応援はありがたかった。避難所での反省としては、豊かな生活を少しでも守ろうとしている人と非常時なので我慢する人との心の葛藤がねたみになったり、上から目線のもの言いになったり、対応が難しかった。自然の営みのふところ、人間の性としてよりそって生きていきたいと思います。多くの犠牲者の御冥福を祈ります。

水を差し上げます

山下宏明

大震災から1週間経ち、水やガスなしの生活に疲れてきた夜、初めて給水車が来た。あわてて妻子ともどもポリタンク、鍋やかんまで持ち出し駆けていった。給水車には「川口市」の文字。遠く埼玉から来てくれ、感謝感激。しかし二度目は、間に合わなかった。空のポリタンクを下げて息子を帰ろうとすると、「この給水車の水、よかったですら差し上げます」と若者に呼び止められた。お断りしたが、芦屋から避難してきた彼は、淡々と重たい被災体験を語る。最後に「もつと頑張ったら、隣のおばあさんも助け出せたかも知れないと思うと、つらくてなりません。知人の家に水はあります。困っているあなたたちに少しでも役立つなら、この水を差し上げたいのです」と。私はその貴重な水をいただいた。驚いたことに、妻も近くで別の人から水を手渡されていた。帰宅した私たち夫婦は、人間の奥深いありがたさに触れ、涙が止まらなかった。今でも、あの夜のことを思い出すと、熱いものがこみあげてくる。

震災体験記

八尾幸次郎

この世の事とは信じがたき程の、激しい揺れ。「このまま続くと家が倒壊するのでは」「早く終わってくれ、夢であって欲しい」と思わずにはいられなかった。家族全員が無事であった事は、不幸中の幸い。昼過ぎ電気が復旧し、水は近所の方からのもらい水で大助かりだった。電気の復旧後、電気ストーブの上に書庫が倒れ、ストーブのスイッチがONとなり、附近にあった家具、本などが燃え上がる寸前であった。宝塚駅附近は：信じられない、心が痛む。あちこちでガスの臭い、コンビニの陳列棚には商品がない、買い物客がパニック状態だ。朝から15分間隔に体に感じる地震、その為、極度の緊張感が続き、夜を迎えるのが恐い。何もかも奪ってしまう自然の力、人間の存在って小さなものなのだという事を、改めて思い知った。どの様に対処・準備をしたら良いかを『備えあれば憂いなし』を記して、私の子孫に伝えていきたい。



兵庫県南部地震・

阪神・淡路大震災を想う

竹谷輝男

突然の上下振動で体が浮く。瓦が落下、壁が破壊、玄関も破壊、家中の調度品は散乱し足の踏み場もない。外に出て近所の方々顔と顔を合わし無事であった事を確認しほっとする。余震も続いた。この世のものとは思えない光景。全国から温かい支援が寄せられ、自衛隊・警察・消防・電気ガス会社等の全国網による救援体制、日本の底力を感じた。宝塚市職員も被災者なのに、よく相談に応じてくれた。また各地からボランティアが集まり、様々な命題を設け個々が動いた。人間が失意にある時、この支援の手にどれほど勇気付けられ助けられた事か。温かい支援、この気持ちが被災者に注がれ、心の繋がりができた。困った時はお互い様、唯々感謝、有難いの言葉に尽きます。日本は自然災害列島、命は自分で守るもの。日常生活に災害対策を留意したものです。備え有れば患い無し。

まさか、まさか！の大地震

高崎恒子

「雷？」窓の外が急にまぶしくなり、紫色の光が東に走りました。ゴーツとする音。シーソーみたいに揺れ始め、体重の重い私が飛びました。気が付くと筆筒たんすの中に。震度7、灰色の空に真っ赤な満月がありました。恐くて三晩椅子で過ごし、揺れる中緊張して片づける毎日。一つ一つ捨てる事が始まり、一つ一つの思い出がなくなりました。洗濯とトイレの水が足りなくなりましたが、自衛隊さんの給水車が来て下さり、宝塚ゴルフ場さんはお水を下さり、お風呂まで使わせていただきました。二月一日水道の蛇口から水が出た時、二月七日には名古屋の東海ガスさんの応援でガスの青い火を見た時の喜びを忘れる事はできません。「もう地震は来ていらん」と言っても、南海大地震がくるようです。どんな揺れ方になるか心配です。最後になりましたが、助けて下さった全国の皆様にご改めて御礼申し上げます。

阪神・淡路大震災 短歌

河内香苗

二十年前のあの日、今までの人生で経験したことのない、予想すらしたことのない激しい揺れに襲われました。震災では、辛いこと悲しいことともに、人の温かさ優しさを感じることもたくさんありました。それを短歌にして伝えられればと思います。

全壊の家の前には花束と合体ロボが並んで置かれ
店先に無料配布のパンや寿司ひいよ屋の店がまた好きになる
年賀状だけの友から電話有り三十年ぶりその声を聞く

屋根瓦託した思い10年後

遠藤里絵

神戸女学院のキャンパスが崩壊した時、生徒で10年後の自分にメッセージを瓦に書いた記憶があります。

日頃の備えが あなたや家族を 守ります



家族で防災会議を行いましょ

災害は、いつどこで起こるのか予想しがたいものです。防災について、日頃から家族でよく話し合っておきましょう。

- ◆家族一人ひとりの役割分担(誰が何を持ち出すのかなど)
- ◆災害時の連絡方法、避難経路の確認(どこで合流するのかなど)
- ◆家の中の危険箇所を確認
- ◆非常持出品の点検
- ◆非常食の保存状態、使用期限の確認

非常持出品の準備をしましょ

避難するときの最小限度の必需品です。

- ◆懐中電灯
- ◆携帯ラジオ
- ◆電池
- ◆医薬品
- ◆貴重品
- ◆自分の情報を書いたカード
- ◆生活用品(洗面具、タオル、ティッシュ、衣類など)



家族構成に合わせた準備をしましょ

- ◆乳幼児のいる家庭→粉ミルク・ほ乳瓶・おむつ・離乳食など
- ◆妊婦のいる家庭→脱脂綿・ガーゼ・さらし・T字帯・清浄綿・新生児用品・母子手帳など
- ◆要介護者のいる家庭→おむつ・ティッシュ・補助具の予備・常備薬など
- ◆障がい者のいる家庭→笛やブザー・日常使用している薬と薬のメモ・連絡先のメモ・その他日常から必要な物など

備蓄物資の準備を行いましょ

災害後、数日間を自足するためのもので、最低でも3日分の準備が必要です。

- ◆非常食
- ◆水
- ◆生活用品
- ◆工具類など



※食料の備蓄は、保存がきき、調理不要で食べられるような食品を、普段から余分に購入し、ストックしておくだけでも行えます。

防 災 ガイ ド



☑備蓄チェックシート

もしもに備えて、家に備蓄しておくもの

- 飲料水(最低3日分)《1人1日3リットルが目安》
- 食品(最低3日分)《ご飯(アルファ米など)・レトルト食品・ビスケット・板チョコ・乾パンなど》
- トイレtpーパー・ティッシュ マッチ・ろうそく ラップ・ゴミ袋・懐中電灯 ポリタンク

非常用持ち出しバッグに入れておくもの

- 飲料水 食品《ご飯(アルファ米など)・レトルト食品・ビスケット・板チョコ・乾パンなど》
- 救急用品《ばんそうこう・包帯・消毒液・常備薬など》 預金通帳・印鑑・現金
- 身元や連絡先が分かるカード ヘルメット・防災ずきん マッチ・ろうそく 懐中電灯 衣類・下着
- 毛布・ラジオ 携帯ラジオ・予備電池 マスク・軍手 携帯電話の充電器 使い捨てカイロ
- ウェットティッシュ 洗面用具 ミルク・紙おむつなど(幼児のいるご家庭)

1995年(平成7年)1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、宝塚市内でも118名の方が亡くなり、1万棟以上の家屋が全半壊するなど、未曾有の被害を受けました。

また地震だけではなく、本市は、梅雨や、台風期には集中豪雨で土石流・がけ崩れなどの土砂災害や浸水被害の危険箇所があります。

震災をはじめ、あらゆる災害に対し迅速、適切な防災活動を行うためには、市の防災対策はもとより、市民の皆さんの平素からの備えと、災害時における一人ひとりの的確な判断や冷静な行動が必要です。

災害が発生したとき どう動く？



地震

◆まず身の安全を確保



◆揺れが収まったら、すばやく火の始末

◆非常出口を確保

◆火が出たらすぐ消火



◆外に逃げるときはあわてずに

◆狭い路地やブロック塀に近づかない

◆山崩れ、がけ崩れに注意

◆避難は徒歩で、荷物は最小限

◆協力し合って応急救護

◆正しい情報をつかむ

風水害・土砂くずれ

◆台風

風圧や飛来物で窓ガラスが割れ、破片が吹き込んでくる危険があります。雨戸を閉め、さらに内側からガムテープをX字形にはり、カーテンを閉めておきましょう。

◆大雨・集中豪雨

集中豪雨は、短時間のうちに狭い地域に集中して降る雨のことです。発生の予測が難しく、急激に状況が変化するため、少しでも異常を感じたら、すぐに避難するようにしましょう。なお、自主避難する場合、どこの小・中学校などに避難するか、市に連絡してください。

◆がけ崩れ・土石流

本市には263カ所の土砂災害警戒区域があります。大雨・集中豪雨や地震によって大きな被害を受けることが考えられますので、十分な注意をしましょう。

1時間に20ミリ以上、または降り始めから100ミリ以上の雨が続き、がけ崩れの危険が高いとされています。長雨や大雨の降りやすい、梅雨や台風の時期には十分な警戒が必要です。

がけ崩れの前兆	土石流の前兆
◎がけからの水がにごる	◎山鳴りがする
◎がけに亀裂が入る	◎雨が降り続けているのに川の水位が下がる
◎小石が落ちてくる	◎川がにごったり流木が流れる
◎がけから音がする	

防災訓練に参加しましょう

自主防災活動で行う防災訓練などには誘い合って積極的に参加し、防災行動力を身に付けましょう。消防署が随時行う訓練や応急手当てなどの講習会にも参加し、正しい知識を身に付けましょう。



訓練の一例

阪神・淡路大震災が起こった「1・17」に、例年、末広中央公園では大規模な直下型地震を想定した総合防災訓練を実施しています。防災行動の向上、防災意識の高揚、関係機関との相互連携強化を目的に、参加者は真剣に取り組んでいます。

地震への備え



阪神・淡路大震災の犠牲者のうち、約8割が家屋・家具の倒壊が原因でした。皆さんのお住まいは大丈夫でしょうか？東南海・南海地震では、大きな横揺れが長時間続くとされており、決して油断はできません。

家具の転倒防止について

阪神・淡路大震災では、多くの人が揺れにほんろうされ何もできませんでした。寝室にはできる限りタンスやテレビなど倒れるものを置かないようにし、家具は転倒しないように固定しましょう。

★割れたガラスは危険です。枕元にスリッパなどを用意しましょう。

風水害・土砂くずれへの備え

台風や大雨は、テレビやインターネットの天気予報で事前に確認することができます。特に、注意報や警報が発表されたときは、十分な警戒が必要となります。台風や大雨はある程度予想できるからと安易に考えてはいけません。日頃から気象情報に注意して、家の周りの危険箇所のチェックや避難経路を家族で確認し合うなど、早めに対策を立てておきましょう。

家屋のチェック

家屋にも浸水や強風への備えが必要です。台風や豪雨が迫ってからの対策は危険なので、日頃から点検をしておくようにしましょう。

(瓦がずれていないか、雨水溝のつまりはないかなど)

災害伝言ダイヤル 171

大規模災害時に、NTTが開始するサービスです。「全員無事です」「〇〇に避難しています」といった安否内容を録音できます。このほか、携帯電話各社にも、災害用伝言板サービスがありますので、利用してください。

- ◆利用可能な伝言数1～10伝言(提供時に通知)
- ◆録音時間は1伝言につき30秒以内
- ◆伝言の保存期間2日間(48時間)

録音時 171...1...XXXX...XXXX...XXXXX... 録音

(ガイダンスにしたがって操作してください) キーとなる電話番号 被災地域の自宅・会社などの電話番号

再生時 171...2...XXXX...XXXX...XXXXX... 再生

情報の把握

ホームページでも情報を発信しています。いざという時に備えて、チェックしておきましょう。

宝塚市内の雨量情報

<http://www03.city.takarazuka.hyogo.jp/>

宝塚市ハザードマップ

宝塚 ハザードマップ 検索

あなたの 避難所はどこ？



避難準備情報

避難勧告の前段階に
発表します。避難に時間の
かかる人は、この段階で
行動を開始してください

避難勧告

避難所に速やかに
避難を始めましょう

避難指示

危険が迫っていますので、
直ちに避難してください

避難時のポイント

- ◆避難はできるかぎり徒歩で行ってください。
- ◆子どもや高齢者など災害時要援護者の支援に協力をしましょう。
- ◆地域の皆さんと協力して避難をしましょう。自治会単位（自主防災会）での避難が理想的です。
- ◆お年寄りや子ども、病人、体の不自由な人などのいる家庭は、特に早めに避難しましょう。
- ◆電気やガスなどの始末と戸締まりを確実にいきましょう。

避難所について

災害が予測されたり発生したら、市民の皆さんは、まず小学校または中学校に避難してください。
その後、状況に応じて、予備避難所の開設を行っていきます。



これら以外に、自主的に避難される際には

市までご連絡ください（避難所開設の準備を行います）。

防災ラジオについて



エフエム宝塚では、災害時などに、エフエム宝塚の放送の電源が自動的に入り、避難勧告などの緊急情報が受信できる防災ラジオを販売しています。詳しくは、エフエム宝塚まで。

TEL.0797-76-5432

お問い合わせ

宝塚市 総合防災課

TEL. 0797-77-2078

災害の 情報は どこで知る？



宝塚市安心メール

災害などの緊急情報や防災防犯に関するお知らせ情報を、市役所や兵庫県災害対策センターなどから携帯電話やパソコンにお知らせします。



携帯電話またはパソコンから takarazuka@bosai.net（または左のQRコード）を入力して空メールを送信！（届いたメールに従って操作してください）

※避難勧告・避難所開設などの情報は、韓国・朝鮮語、中国語、ポルトガル語、英語、ベトナム語でも配信しています。<http://bosai.net/e/>

緊急速報メール

緊急速報メールは、登録の有無に関係なく市域内にいる人の所持するNTTドコモ、KDDI、ソフトバンクモバイルの携帯電話に、緊急性の高い避難勧告などの防災情報をメールで一斉配信するものです。月額利用料や受信料は無料で利用登録の必要はありません。市域外にいる人の携帯電話には配信されません。対応機種や受信設定の方法などは各キャリアの窓口にお問合せください。



NTTドコモ **緊急速報「エリアメール」**

<http://www.nttdocomo.co.jp/service/safety/aremail/>

KDDI **緊急速報メール**

http://www.au.kddi.com/notice/kinkyu_sokuho/index.html

ソフトバンクモバイル **緊急速報メール**

http://mb.softbank.jp/mb/service/urgent_news/

エフエム宝塚災害情報

市域で災害が予測されたり発生した場合などは、広報車などでお知らせするほか、エフエム宝塚（83.5 MHz）は、番組を中断して災害対策本部などからの災害情報を放送します。

タイムラインで見る宝塚市の 1995年(平成7年)「1月17日」

阪神・淡路大震災 時系表(市の動きを中心に、国・県・社会の動きも採録)

時刻 主な出来事

- 5:46 近畿地方で強い地震発生、直後に市内全域停電、一部復電
- 5:49 NHKが「非常に大きな揺れを感じた」と第1報
- 5:55 大阪管区気象台が地震情報第1号発表
「震源地は淡路島北端。北緯34.6度、東経135.0度、震源の深さ約20km(その後、約14kmと修正)、マグニチュード7.2と推定。京都、彦根、豊岡で震度5、大阪、姫路、奈良、和歌山で震度4」
- 5:58 宝塚市消防本部が『災害対策指揮本部』を設置
- 5:59 高司5丁目と中山寺1丁目にて火災発生
- 6:00 宝塚市災害対策本部を市役所G階に設置
新幹線・JR・私鉄・名神高速・中国自動車道が全面ストップ
- 6:13 大阪管区気象台が「神戸震度6(烈震)」と発表
- 7:00 兵庫県が災害対策本部を設置
- 7:29 気象庁が「洲本震度6」と発表
- 7:38 近畿地方に再び強い地震。奈良震度4、大阪震度3
- 8:00 水道局対策本部設置。水道業者に緊急出動を要請
- 9:00 水道施設災害復旧開始(水道業者9班35人で復旧)
- 9:20 市長が登庁
兵庫県警が「死者8人、生き埋め189人以上、行方不明者33人」と発表
少年自然の家(現・宝塚自然の家)が被災者用おにぎり作り開始(毎日2,000個)、毛布2,000枚搬出
- 9:30 犠牲の死者を市立体育館に搬送する班を編成し、行動に着手
- 9:35 市立スポーツセンターで救護所開設(2月10日まで)
- 9:50 全市民に避難所(学校など)開設とその誘導、ガス漏れと火気禁止の広報について、4班編成。直ちに、広報車で行動着手
- 10:00 兵庫県知事が自衛隊に出動要請
市長が陸上自衛隊第36普通科連隊(伊丹)に水と食料の供給を要請
市立国際・文化センターに外国人対象の被災生活相談を設置。電話受付のみ(3月31日まで)
- 10:04 政府が災害対策基本法に基づき、小沢潔国土庁長官を本部長とする『非常災害対策本部』を設置(閣議決定)、初会合
- 10:15 市民から断水の一報が水道局に入る。以後通報あいつぐ
- 10:30 NHKがFMで安否情報を流し始める
- 11:00 気象庁が『平成7年(1995年)兵庫県南部地震』と命名
- 11:18 芦屋市へ消防車1台応援出動
- 11:33 南ひばりガ丘2丁目にて火災発生
- 11:50 大阪ガスが神戸市、芦屋市を中心に約42万5,000戸で供給停止
- 12:00 警察庁発表「死者203人、負傷者711人、行方不明者331人」
- 12:50 宝塚市災害対策本部会議の初会合(17日は4回開催)
・各部門へ災害状況の把握、対応について伝達
・県災害対策本部へ被害状況を逐次報告
・県災害対策本部へ自衛隊の派遣要請



- 13:00 クリーンセンターが生活ごみの収集業務再開(幹線道路のみ、収集車直営6台、委託6台)
NHK教育テレビが安否情報を流し始める
- 13:17 清荒神2丁目にて火災発生、住宅2棟全焼
- 15:45 兵庫県知事が記者会見、二次災害の防止を呼び掛ける
- 16:00 村山富市首相が緊急記者会見、「人命救助に万全を期す」
- 18:00 警察庁発表「死者1,042人、負傷者3,569人、行方不明者577人」
- 18:07 東海道新幹線名古屋-京都で運転再開
- 19:20 阪急宝塚線の池田-梅田で運転再開
- 19:30 兵庫県災害対策本部が「阪神間を中心に、停電18万戸、ガス供給停止72万戸」と発表
- 21:00 警察庁発表「死者1,311人、負傷者4,241人、行方不明者1,048人」
- 23:04 兵庫県東部で地震。神戸で震度3
- 24:45 警察庁発表「死者1,681人、負傷者6,334人、行方不明者1,017人」

市内被害状況

人的被害(発表数) 死者79人、負傷者406人
 家屋被害(発表数) 全壊58棟、半壊177棟
 ガス復旧状況(利用者数7万5,700戸) 停止戸数6万7,400戸 停止率89.04%
 水道断水状況(全戸数7万4,000戸) 断水戸数5万戸 断水率67.57%
避難者数1万2,925人 避難所数50カ所



市内の主な動き

給水車5台で市内任意の地点で給水実施(宝塚アーバンサービス㈱も協力)、
 同時に浄水場での給水も実施、広報車により給水地点を広報
 小・中学校各施設の被害状況調査開始(3班編成)
 市立武道館(遺体安置所)へ遺体の搬送、収容開始。遺族から葬儀の方法について意向確認
 災害対策臨時駐車場として市立駐車場開放
 災害対策本部設置に伴う臨時電話20台設置
 記者クラブ、テレビ局、ラジオ局各社へ情報提供と報道依頼(随時)
 広報車4台で全市に避難(学校など)呼び掛け
 炊き出し用米、紙食器など調達開始、炊き出し体制調整(場所、人員配置)、毛布の調達、配布開始
 市内の学校で唯一ガスの出ている山手台小・中学校でご飯の炊き出し(おにぎり作り、午後から調理員、職員約100人動員)
 市内の幹線道路が終日大渋滞となる
 民生委員が要援護者の安否確認と救援活動開始
 安倉デイサービスセンターにおいて要介護者の二次避難所を開設(2月1日に総合福祉センターに移設し、5月7日に閉鎖)
 宝塚栄光園、老人ホーム福寿荘でも二次避難所を開設



・当日の消防車の出動状況(累計) 火災4件、救急65件、救助46件、警戒27件、119番受信件数1,400回
 被害甚大な芦屋市へ消防隊1台4名、西宮市へ消防隊3台11名、救急隊1台3名、消防団1台5名が応援活動

・6市5町(宝塚市、神戸市、尼崎市、芦屋市、伊丹市、西宮市、津名町、北淡町、淡路町、一宮町、東浦町)に災害救助法を適用(2月1日までに10市10町に拡大適用される)

自然災害から「住まい」「家財」を守る

フェニックス共済

あの阪神・淡路大震災の教訓を生かし、県が実施している制度です!!
身近に起きる様々な災害への備えがさらに充実。ぜひ加入ください!!

フェニックス
サポーター
はばたん



小さな負担で大きな支援

県内に住宅をお持ちの方の 住宅再建共済制度

年額5,000円で
最大600万円
の給付

分譲
マンションに
お住まいの方
も入れます

※市町が発行する「り災証明書」で、
半壊以上の認定を対象



県内にお住まいの方の 家財再建共済制度

年額1,500円で
最大50万円
の給付

借家(賃貸、
社宅等)に
お住まいの方
も入れます

※市町が発行する「り災証明書」で、
半壊以上又は床上浸水の認定を対象

平成26年8月1日から一部損壊特約がスタート

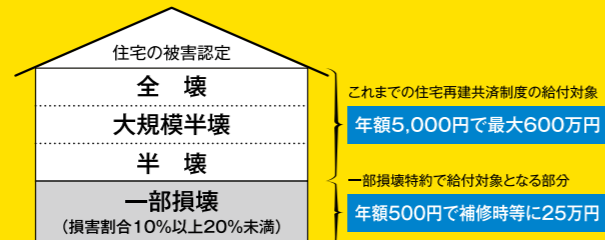
ワンコインの上乗せ加入でさらに充実もっと安心!!

★現在既に6万戸を超える特約加入。未加入の方はぜひこの際に! ※住宅再建共済制度とセットで加入ください。

一部損壊特約

年額500円で
補修時等に
25万円の給付

※市町が発行する「り災証明書」で、一部損壊(損害割合10%以上20%未満)の認定を対象



※加入申込書付パンフレットを、最寄りの郵便局や県民局・県民センター等に置いてあります。

マンション管理組合向けに共用部分の再建支援制度もあります。

問合せ先 (公財)兵庫県住宅再建共済基金 TEL.078-362-9400 (平日 9:00~17:00) フェニックス共済 検索

阪神・淡路大震災

1995年(平成7年)1月17日(火)午前5時46分52秒に発生した兵庫県南部地震は、震源が淡路島北部の野島断層付近で、阪神・淡路島を直撃した。この地震による被害は兵庫県を中心に阪神地域一円にわたり、特に震源地に近い淡路島北西部や神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市などにおいて多数の人命が失われるとともに、住宅、ビル、工場、鉄道やガス、上下水道、電気のライフラインなどに大きな被害をもたらした。

震災をバネとして

阪神・淡路大震災を機に市民活動やボランティア活動が活発になり、1995年(平成7年)は『ボランティア元年』と言われた。活発になったボランティア活動を支援する新たな制度として『特定非営利活動促進法』が1998年(平成10年)に施行された。また、同じく1998年(平成10年)には、自然災害によって住宅が著しい被害を受けた世帯に支援金を支給することを定めた『被災者生活再建支援法』が施行された。





冊子名：震災20年シンポジウム冊子
発行日：2015年3月発行
発行元：兵庫県阪神北県民局、宝塚市
企画・編集：特定非営利活動法人宝塚NPOセンター
デザイン：岩野了（合同会社デザインサポート）
木村 淳